

別居祖母へのヒアリングデータにみる孫育ての悩みと 求められる支援

小野寺 理 佳

I はじめに

現在の日本においては、祖父母世代を育児の社会的資源としてとらえる認識が広く共有されている。そのなかで特に最近、祖父母による孫育てを「新しい時代の祖父母・孫関係」ととらえ、そこに生ずる世代間のコンフリクトを含め様々な問題を考えていこうとする動きも現れはじめている¹⁾。祖父母のための孫育て講座等の新しい試みもみられることから、このテーマが社会において認知されつつあることは明らかである。こうした流れは、たしかに、祖父母に、庇護される存在という地位ではなく、家族・親族関係における積極的な役割を与え、異世代間の交流を促進させるという意義をもっている。しかしながら、そこでは、祖父母は子や孫のために尽くすのが当然であり、彼らにとってそれは喜びであることが暗黙の前提とされている。しかるに、祖親期の長期化という状況においては、ひとりの人間としての中高年期の生き方のなかにグランドペアレンティングをいかに位置づけるのか、という視点もまた重要である。即ち、現代社会においては、祖父母のQOLを保障あるいは向上させ、同時に、グランドペアレンティングの質をも向上させていくことが、重要な社会的課題として浮上する。

本稿は上記のような問題意識のもと、孫育てに関わる祖母に焦点をあて、ケアギビングの悩みおよびそれへの取り組みを知り、祖父母世代を支援する仕組みを考えるものである²⁾。

II これまでの研究と本稿の課題

筆者は2001年6月、北海道の人口180万人規模の都市部に居住する祖母を対象として孫育てに関するヒアリングを実施した。三世代同居が減少しつつある現状をふまえ、孫と別居する者に焦点をあてた。そのデータをケア満足度という視点から分析した結果、満足度は「認知される精神的ケアの量」が多いほど高く、さらに、この「認知される精神的ケアの量」は祖母と孫の親との日常的な関係性によって決まることが明らかとなった³⁾。つまり、孫育てという行為は、祖母が家族・親族関係を意図的・戦略的に構築するプロセスともいえるのであり、このことは高齢期における自立を志向しながら、自分が生きやすい家族環境を主体的につくりたいという選好的な態度をとる中高年が増えつつあることを背景としたものと考えられた。従って、祖母の抱く悩みをみると、その主要かつ深刻なものは「老後同居(あるいは老後介護)の不確実さ」にまつわるものであるが、しかしながら、現にケアギビングに従事している以上、非常に実践的・具体的な育児の悩み・葛藤もまた抱えこまざるをえない。例をあげるなら、孫との接し方や躰け方、育児方針をめぐる孫の親との対立、体の疲れ、責任の重さからくる重圧感等がそれである。いってみればケアギビングの質に関わる悩みであり、それらを抱えていることが孫育てそのものへの不満となるわけではない点に注意したい。

ところで、先に述べたように、祖父母世代のQOLを保障しつつケアギビングの質を向上させるためには、この点について具体的に吟味することが必要と思われる。それは、ケア満足度の内実を検証することであり、我々がケアギバーをどのように支えていけるのかを考えることでもある。しかるに、先行研究を探ると、このテーマを中心にとりあげているものはみあたらず、祖父母世代のケア満足度がとりあげられるなかでわずかにふれられているに過ぎない。

当該研究には、主観的幸福感を測定しているもの(宮中ほか 1995; 杉井ほか 1996)や、祖父母と孫の交流実態と孫に対する意識を探るなかで祖母のケア満足度に言及しているもの(清水 1994; 財津 1995; 北村 1999)がある。そのなかで、ケアギビングの悩みや苦労は「(孫の)親世代が思うほど」はないとする見解(財津)はたしかに少数であるものの、その他の研究においても、「ケアギビングが過度の身体的負担になる、孫の母親と育児方針や育児の仕方が異なる」(宮中ほか)、「孫の親と子育てについて意見があわない」(清水、杉井ほか)、「自分の時間が全くもてない、孫の親が感謝の意を示さない、孫の親との関係がうまくいかない」(北村)等の悩みが存在することが指摘されるのみである。いずれも量的調査であるため、祖母個々にとってそうした悩みや苦労がどれほどのものであり、どのように解決がはかられているか、についての考察が充分になされているわけではない。祖父母世代と孫の親世代との対立や衝突の存在については、孫の親世代に焦点をあてた育児支援研究においても述べられているが(飯島ほか 1991; 福島ほか 1991; 高橋 1995)、そこで注目されるのは孫の親が認識するところの悩みであり(祖父母と育児方針が違う、祖父母が子どもを甘やかす、祖父母が育児の主導権を握っている等)、祖父母世代のそれについての目配りはない。さらに、その対立や衝突を打開するための両世代の対応について詳しく検討されたものもみあたらない。また、母子保健分野の研究報告において、孫育てにまつわる祖父母からの悩み相談の内容がとりあげられているものもあるが(吉澤

1990)、それはケース報告にすぎず、悩みの原因や対応姿勢についての検討はやはり不十分といわざるをえないのである。このように、従来の研究から、祖父母世代の抱えるケアギビングの悩みやその解決に向けての対応のありようを具体的に知ることは難しいといえる。

そこで、本稿では、祖母のケアギビングをめぐる悩みや問題、または願望・期待を、祖母を取り巻く諸環境に注目しながら検討し、問題解決に向けての取り組みをみる。ケアギバーのために今後求められる支援についても考えてみたい。以下、Ⅲはデータ収集の手続き、Ⅳは事例の検討と求められる支援、Ⅴは結びである。

Ⅲ データ

本稿では前述のヒアリングデータを取りあげる⁴⁾。データ収集の手続きについて簡単に述べておく。ヒアリング対象者である祖母は11人、選定に際しては、「子・孫と別居していること」と、交流にとどまらずケアの授受が成立しうる「1時間以内の近居であること」の2点が条件とされた。ケアの提供先が息子の家庭であるケース、娘の家庭であるケースはほぼ同数、孫の年代は、幼児～小学校高学年である。ヒアリングでは、祖母が最も多くのケアを提供している子ども(以下、対象子と記す)に関して、対象子家族との関係や後期高齢期の生活や介護についての心づもり・不安・期待、家族認知等、ケアギビング周辺のさまざまな生活状況および意識を問うた⁵⁾。時間は各人約2時間である。当該テーマに関わるものとしては、ケアギビングの内容をめぐる悩みや苦労、ケアギビングを遂行するうえでの世代間の関係性や生活条件の問題、現状打開のための対応策、今後期待する支援等についての質問をおこなった。11人の属性等は表1の通りである。なお、11人の祖母は、「ケアギビングに支障がない程度には健康」「自宅に要介護の曾祖父母・祖父がいない」「未成年の子どもを養育していない」「フルタイムの雇用労働者ではない」「祖母が働かなくても生活可能なだけの経済的基盤がある」の5点におい

表1 対象者の属性

ケース	祖母 年齢	祖母就業 状況	祖母年収 (円)	祖母 学歴	祖父 年齢	祖父就業 状況	祖父年収 (円)	祖父 学歴	住宅	子の性別 構成と年齢 *対象子 [] 独身	居住距離	孫年齢 (孫の母 就業状況)
①	66	専業主婦	100万未満	高校	72	水道工事	200~400万未満 (年金含)	高小	一戸建(弟夫婦と2世帯)	*長男 39 [長女] 34	徒歩5分 同居	7歳 (看護師)
⑥	66	農業・不動産賃貸	800~1000万未満	高校	67	農業・不動産賃貸	1500万以上	中学	持ち家一戸建	長女 43 *次女 40 [三女] 36	車で30分 隣居 同居	11歳 (専業主婦)
⑧	67	専業主婦	100~200万未満	中学	死去	—	—	—	持ち家一戸建	*長女 40 次女 38	徒歩5分 車で30分	10歳 (パート)
⑨	63	専業主婦	100万未満 (年金)	高校	68	運送会社	400~600万未満 (年金含)	旧制 中学	持ち家一戸建	長女 42 *次女 36 三女 36	車で40分 車で30分 車で20分	4歳 (中学教員)
⑪	66	専業主婦	100万未満 (年金)	短大	71	無職	200~400万未満 (年金含)	大学	持ち家一戸建	長女 41 *次女 37 [三女] 31	車で40分 車で40分 同居	5歳 (保育士)
②	69	専業主婦	100万未満 (年金)	女学校	70	無職	200~400万未満 (年金含)	旧制 中学	持ち家一戸建	長女 38 *次女 37	車で20分 車で20分	8歳 (看護師)
④	62	パート	100万未満	中学	62	建設作業員・アパート経営	200~400万未満	中学	持ち家兼アパート	長女 38 *次女 35	車で15分 同アパート	11歳 (専業主婦)
⑦	58	農業	100~200万未満	中学	60	農業	1000~1500万未満	中学	持ち家一戸建	*長男 36 長女 29	車で40分 車で40分	9歳 (専業主婦)
⑩	60	洋服仕立 自宅自営	100万未満	専門学校	62	マンション経営	400~600万未満	高校	持ち家兼賃貸 マンション	*長男 36 長女 33	同マンション 徒歩10分	7歳 (専業主婦)
③	55	専業主婦	なし	高校	54	管理職	600~800万未満	高校	持ち家一戸建	*[長男] 28 次男 28	同居 車で30分	4歳 (母親生別)
⑤	69	専業主婦	100万未満 (年金)	中学	71	無職	200~400万未満 (年金)	旧制 中学	持ち家一戸建	[長女] 43 *長男 41	車で30分 車で30分	8歳 (パート)

出所) この表は小野寺(2003) p. 81掲載の表1をもとに、データを加えて新しく作成した。

て共通する。

IV 考 察

ここでは、まず、ケアギビングに関する祖母の悩みを把握する。ケアの量の多寡やケア満足度の高低とはどのような関係があるのだろうか。続いて、それらの問題を解決するために祖母によって模索されている方策の有無や成果、今後望むことを整理しつつ、ケアギバーに必要な支援とは何かを考える。

1 ケアギビングをめぐる悩み・不安・問題とそれらが生ずる状況

ヒアリングした11ケースについて、祖母が認

知するケアギビングをめぐる悩み・不安・問題等を整理したものが表2である。悩みの深刻度とは祖母に認知される主観的なものであり、各祖母に悩みの内容や程度を自由に語ってもらった後に、A~Dの4段階を提示・確認して選んだものである。表に明らかであるように祖母の悩みはふたつに分類することができる。ひとつは「ケア内容をめぐる悩み」、即ち、ケアの内容・タイミング・効果や、育児方針をめぐる孫の親世代との意見の相違や対立にまつわるものである。もうひとつは「ケア基盤をめぐる悩み」である。これは、ケアを提供するうえでの祖母自身の身体的・心理的・経済的な不安あるいは不安定さに関する悩みである。

表2 ケアギビングをめぐる祖母の悩み・不安・問題

ケース	認知されるケアの量			ケア満足度	「ケア内容」をめぐる悩み・不安・問題		「ケア基盤」をめぐる悩み・不安・問題	
	身体的	経済的	精神的		認知される深刻度	主な内容	認知される深刻度	主な内容
①	●	●	●	満足	A	孫にもっと勉強させたいが、言うことをきかない	A	身体的疲労、自分の時間がもてない、仕事ができない
⑥	◎	◎	◎		A	今どきの子どもの育て方がわからない、躾けが難しい	A	身体的疲労、自分の仕事を優先できない、お金がかかる
⑧	●	◎	◎		A	どこまで孫のいうことをきいていいかわからない	B	身体的疲労、結構お金がかかる
⑨	◎	◎	●		A	孫の親の躾けや教育の仕方のままでいいのかどうか心配	A	身体的疲労、自分の時間が少ない、孫育てで責任感がストレス、孤独
⑪	○	×	●		A	子育ての仕方が自分の時と変わってしまった	B	身体的疲労、心理的疲労
②	△	×	○	満足でも不満でもない	B	孫に何を伝えていくべきか、孫の気持ちを理解しているか	C	身体的・経済的負担感は少ない、責任あるがそれが喜びでもある
④	○	◎	○		C	叱る・躾けるのは親の仕事、自分はそのまま受け入れる	C	経済的負担はない、疲労感もあまりない
⑦	○	○	○		C	孫の親が言うように孫と接しているの、だいたい大丈夫	C	身体的疲労
⑩	●	○	○		C	割り切ってつきあっているの、あまり悩むことはない	B	自分の仕事の時間が足りない、身体的疲労、拘束感
③	◎	○	△	満足していない	A	ちゃんと育てているのか、祖母育ちといわれないか、いつも不安	A	責任が重い、身体的疲労、育児関連支出が多、祖父の助力なく孤独
⑤	◎	○	△		A	孫の母親が自分の育児方針に拒否的	A	身体的疲労、孫との接し方について祖父と意見があわず疲れる

注) この表は小野寺 (2003) p. 82 掲載の表2の一部(ケアの量、ケア満足度の部分)を使用した。

ケアの量の多寡 ◎:十分にしている ○:まあまあしている △:あまりしていない ×:まったくしていない

認知される深刻度 A:よく悩む B:時々悩む C:あまり悩まない D:まったく悩まない

(1) 悩み・不安・問題の内容

はじめに悩みの内容をみてみよう。孫との関係自体は全ケースにおいて良好と認識されており、悩みはケアギビングの質に関わるものとなっている。「ケア内容をめぐる悩み」としては、「今どきの子ども」である孫の教育や躾けの難しさをあげる者が目立つ。「おふくろうまくやってくれ」って言われても困るときあるよ。勉強は大事。今やらなくちゃいけないことは今やらないと後悔するし、そのために私が預かってるんだから」①、「お祖母ちゃん育ちって言われないか、考え始めると眠れなくなる。甘やかしているつもりはないけど」③、「一生懸命世話しても、今はもう全然

違う。からまわりしてるような気がしますよ」⑥、「孫に小遣いやるっていても、どうすればいいのかね。あんまりやっても孫のためにならないでしょ」⑧といった発言がきかれた。このように、自分のケアギビングの内容に関して悩みや迷いを抱える者は多い。

「ケア基盤をめぐる悩み」についてみると、ケアギビングによる身体的疲労をあげる者が圧倒的に多い。その他、自分自身の時間をもつことが難しい、育児責任が重圧になっている、お金がかかる等があげられている。祖母は孫育てを唯一の生きがいとしているわけではなく(表3)、「本当は仕事したいんだよね。ずっと働いてきたから。

表3 生活の楽しみ・生きがい

ケース	就業状況 祖母/母	日々の楽しみ・趣味・生きがい	今後続けたいこと、これからしてみたいこと
①	主婦/就業	友人との食事・小旅行、夫と温泉・ドライブ	友人ともっと自由に会う・旅行する、在宅ワーク
⑥	就業/主婦	仕事、夫と社交ダンス、友人との麻雀・温泉	友人付き合い、気楽に外出する、ダンスをもっと楽しむ
⑧	主婦/就業	家庭菜園、鉢花、手芸、友人付き合い	家庭菜園、鉢花、手芸、友人付き合い
⑨	主婦/就業	娘の就業支援、水泳	友人と時間を気にせず会う、スキューバダイビング、旅行
⑪	主婦/就業	アートフラワー、夫と旅行	アートフラワー、友人付き合い、パソコン習う、自由に旅行
②	主婦/就業	古典講読、絵手紙、音楽会、読書、夫と旅行	旅行、読書、音楽会、古典講読、現代文学を学ぶ
④	就業/主婦	仕事、友人とのカラオケ・温泉、夫と温泉巡り	仕事、スポーツジムに通う、散歩、友人と温泉
⑦	就業/主婦	農業、夫と旅行、大正琴サークル、鉢花	仕事、もっと花を育てる、旅行
⑩	就業/主婦	仕事、山歩き、仕事仲間と外国旅行、家族旅行	仕事、孫と山歩き、仲間との付き合い、家族旅行
③	主婦/――	歌謡教室、友人との食卓会	時間を気にせず外出する、友人や夫と旅行する
⑤	主婦/就業	手芸、孫との交流・旅行、夫とドライブ	孫ともっと頻繁に会う、夫や孫との旅行、夫とドライブ

注) 主婦：専業主婦

就業：フルタイム、パート、自家営業含む

(中略) 諦めきれない」①、「お友達とのつながりが今は切れてしまっています。全然会えません。孤立してるっていうか、そういう感じはあります」⑨、「孫のことを優先しますが、私の仕事も期限がありますから。(中略) 時間はいくらでもほしいです」⑩、「(就業継続は) 私が言い出したことですが、(娘が) 働き続けるために親がここまでしないとイケないなんて」⑪といった悩みがきかれる。

(2) 悩みの深刻度とケア状況

続いて、悩みの深刻度とケア状況との関係を見てみよう。表2を概観すると、ひとりの祖母において、いずれか一方の悩みが突出して深刻と認識されているケースはなく、両方の悩みとも深刻度が高い場合と、そうともいえない場合とに大体二分されている。そして、ケア満足度において「満足している」群と「満足していない」群では、「満足でも不満でもない」群に比較して深刻度はより高い傾向にあることがわかる。即ち、指摘すべきは、ケア満足度が高いことが悩みから解放されていることを意味しないということである。これはどのように解釈できるだろうか。老後同居(あるいは老後介護)が確約された親子関係と認識されている「満足している群」と、期待はあるものの確約が得られず不安に苛まれている「満足していない」群では、ともに対象子への老後期待

が高く、それゆえ、親子の関係性への関心が高まると考えられる。つまり、ケアギビングを通して親子の関係性がより緊密なものになることが大いに望まれていると推察される。「息子達に頼まれている。これは立派な仕事」①、「お祖母ちゃん育ちって言われてしまったら、息子に悪い」③、「せっかく子どもらが頼りにしてくれているんだから」⑦、「私が孫をだめにしちゃったりしたら、申し訳ないでしょ」⑧といった表現をみれば、孫の親にとって自分が役立つ存在であるかどうかが祖母にとっては重要な関心事であることがわかるだろう⁶⁾。そこで両群について祖母のケア態度をみると、孫育てについて祖母はかなり熱心に関わろうとしており、認知される身体的ケアの量も多い傾向にある。とすれば、孫との頻繁な接触のなかで、「ケア内容をめぐる悩み」が増えるとしても不思議はないだろう。「ケア基盤をめぐる悩み」においても、両群では身体的疲労が共通してあげられ、また、孫育ての責任を強く感じるところからそれが心理的な重圧と意識され、経済的負担の大きさが問題となっている。

これら2群に対し、老後の同居(あるいは老後介護)の不確かさに際して現在は自身の生活を楽しむことに関心が寄せられる「満足でも不満でもない」群では、子・孫とつかず離れずの関係が築かれている。極めて自立志向が強い(②)、ある

いは、仕事を生きがいとしている(④⑦⑩)ため、対象子の育児については見守りの態度がとられているのである。従って、孫と直接ふれあう身体的ケアの量も他群よりは相対的に少なく、そこから生ずる「ケア内容をめぐる悩み」も「ケア基盤をめぐる悩み」もそれほど深刻ではないと考えられる。「私が孫のことを考えていろいろ悩んでも気をもんでも、ひとり相撲みたいですから。娘夫婦と心をあわせて孫を育てるっていうのは難しいですからね、私はそのまま受け入れる」④、「どうやったらよく育つのか考えてもわからないときは本当に頭抱えます。でも、別所帯ですからお互い自分でやっていかないと」⑦といった発言がきかれ、ストレスをため込まぬように、ケアギビングと適度な距離をおこうとしている様子がみてとれた。

このように、祖母の悩みの深刻さは、ケアギビングが親子の関係性へもたらす効果への積極的関心に由来するものであり、ケアギビングへの忌避的な心情ゆえではない。従って、悩みや問題を解決することについては概して前向きな態度が見受けられた。

2 問題解決の方策あるいは今後望むこと

次に、祖母がその悩みを解決するためにとっている解決法・対応策およびその効果と、悩みの解決や予防のために祖母が今後望むことをみることにしよう(表4)。

(1) 解決策・対応策、相談先

はじめに、解決策や相談先等をみてみよう。まず、「ケア内容をめぐる悩み」については「相談して対応策を考える」との回答が多い。相談相手としては孫の親が最も多くあげられている。とりわけ、対象子が実の娘である場合には些末な事柄についても逐一連絡・相談がなされる傾向にある(④⑥⑧⑨⑪)。ただし、「孫の親は多忙なため当てにならない」①⑨、「若い人たちはやっぱり甘いからね。何でそんなこと気にするのって言われるでしょ」④、「若い人の考えることはわからない」⑧という言葉もあるように、対象子との関係性をより緊密なものにしたいと考えているにせよ、

祖母は、孫の親の育児の仕方にも無条件に賛同しているわけではなかった。孫の親以外の相談相手としては、他に、祖父⁷⁾や対象子のきょうだいが選択されているが、「励まされて元気になった」⑤、「気持ち楽になった」⑨、「愚痴を言って気が晴れた」⑪といった回答が多く、相談することによって問題そのものが解決された例はごく少数しかない。このように、「ケア内容をめぐる悩み」について祖母は周囲の人間の意見をきき、それを取り入れようとする姿勢をもつものの、そこから有効な成果を得ることはできていない。

一方、「ケア基盤をめぐる悩み」への対応をみると、「ケア内容をめぐる悩み」への対応に比較すれば、祖母は一定の成果を得ているように見受けられる。ケア環境の整備に関わる悩みであるため、自分自身の発想の転換や工夫、あるいは祖父との協力によって事態を改善することも可能である点が前者とは異なる。具体的な解決策としては、「外で働くだけが仕事じゃないって考えるようにした。今、在宅の仕事の話がある。在宅なら孫の世話しながら仕事できるから」①、「ストレスがたまらないように自分で気を付けなと。だから、短い時間でリフレッシュできる趣味をいつもさがしている」③、「お父さんにも手伝ってもらうようにして、そうすれば、私も大分楽になる」⑦、「お金については使った分はもらうようにすることにした。言いにくいけど、そうしないと付き合いが長続きしないと思って」⑧等がある。ただし、なかには、現在の祖父母の力では解決不能な問題もある。経済的負担の重さ(「孫のための出費を抑えることができれば自分の老後の心配なしに世話ができるんだけど」③)や時間のやりくりの困難さ(「自分の時間があれば私のストレスも何とかなるけれど、今の状況では不可能。お父さんにも仕事があるから」⑨)があげられている。この場合、「ケア内容をめぐる悩み」への対応とは異なり、対象子のきょうだいに相談あるいは支援が求められることはなかった。他子が当てにされない理由としては、他子に身体的・物質的負担を求めた場合に、それに報いることが難しいからと思われる。なぜなら、祖母と対象子との間には他子

表4 ケアギビングの悩み・不安・問題の解決法および解決・予防のために望むこと

ケース	「ケア内容」をめぐる悩み・不安・問題の解決策、相談先およびその成果など	「ケア基盤」をめぐる悩み・不安・問題の解決策、相談先およびその成果など	悩み・不安・問題の解決・予防のために必要なもの、社会に望むこと
①	孫の親は仕事に忙しく当てにならない。いい教材があれば自分が教える。自分がしっかりするしかない	在宅の仕事をさがし、仕事をしながら孫の面倒をみるつもり。友人付き合いが減るのはがまんする	現代の子どもの育て方、特に、何をどのように教えればいいのかを教えてください。ところがあればいい
⑥	孫の発育や躾けについては対象子の姉に相談する。姉から対象子に言ってもらおう	跡継ぎだから仕方ない。今は自分の仕事や付き合いを後回しにして体力温存	自信をもって孫とつきあっている人たちは少ない。自信をもつべき
⑧	対象子(娘)に相談するが、若いひとの考えることは正直わからないこともある	小遣いをやるのを控えるようにしている。話し相手になるだけでいいと思う	他の人たちが孫とどうつきあっているのか知りたい。自分ひとりではわからない
⑨	孫の親は忙しく相談する余裕もない。他子・祖父と話す。心配は解消されない	自分の好きで孫の面倒みてるから、疲れても文句はいえない	就業する女性のための支援をもっと社会でしてほしい。同じ立場の人に会いたい
⑩	他子に愚痴を言うが、解決にはならない。育児本を読む	そろそろ夫婦ふたりの予定を優先するようにしたいと対象子に伝えた	公的支援の充実。育児について学ぶ機会がほしい
②	夫に話すが、ふたりともよくわからない。友人には話したくない。考え続けるだけ	特になし	現代の育児について知りたい。近所の人や友人ではなく公の機関がいい
④	孫の母親に言っても、若い人たちには通じない	特になし	祖父母がなんでもできるなんて考えないで、できることだけすればよい
⑦	孫が大きくなって付き合い方が難しくなっても相談する相手はいない	体が辛いときは祖父に協力を求める	自分でも考えたり勉強したりしないとだめ。テレビや本で勉強するしかない
⑩	何かあったら娘に話さと思うが、愚痴をきいてもらっただけだと思う	忙しいときは孫の世話を断る	「私たちも孫をあずけられる場所があれば安心なんですけどね。ないですからね」
③	子どもの中学時の恩師に相談する。孫の友人の親は若すぎて話ができない。祖父は相談にのってくれない	友人たちは「孫のために我慢」と言うだけで無理解。体の不調は病院のカウンセラーに相談。ストレス発散につとめる	相談先がほしい。自分の事情を理解してくれる場所や子どもを育てている祖母に会える場所があったら利用したい
⑤	祖父の積極的関与が孫の母親との関係を一層悪化させているのでうまく取りなすようにつとめる	祖父の考え方をかえることはできない。あきらめている	誰か間に入ってもらった方がいいのかもしれない。育児相談のような孫相談できる場所があれば行くかもしれない

と比較すればはるかに密な関係性が成立しており、将来の老後介護とひきかえの高額援助がなされたり(①④⑥⑦⑨⑩)、財産承継が約されている(あるいは計画されている)ケースも多いからである(①④⑤⑥⑦⑧⑩)⁸⁾。それを示す言葉として、「娘に助けてもらうのも考えものだ。やってもらっても遺してやれないんじゃない、頼るわけにはいかない」⑩というものがある。

このように、ケアギビングをめぐる悩みや問題を解決するうえで、祖母は、結局のところ、自分自身の解決能力に頼るほかない状況にある。相談相手としても、ケアギビングを実際に支える存在としても、身内が果たしうる役割はごく小さいということがわかった。

(2) 問題解決・予防のために今後必要なもの、望むこと

そこで、次に、悩みや問題の解決や予防のため

に今後必要なもの、望むことを問うところ、多くの祖母が望んでいるのは、現代の育児についての情報を得たり、自分のストレスについて相談ができる機会や場所であった。悩みの深刻度による違いをみるならば、深刻度が高い群(①③⑤⑥⑧⑨⑩)はいうに及ばず、低い群(②④⑦⑩)でも、育児の知恵や情報を獲得することへの関心そのものは低くはなく、親子関係強化への潜在的な関心が認められる。この場合、育児について学んだり相談をする場所としては保健所のような公的な場所をイメージする者が多く、「仲良くても友達には言えない」①、「昔からの友達でも、こういうことは言いたくないですね。そういうのは抜きで付き合いたい」②、「近所のひとには、どっちかといったら、知られたくないです」⑤といった言葉からもわかるように、親戚・友人・地域の知人等の個人的なつながりを頼りにするという回答は

皆無であった。

その際、ふたつの悩みのうち「ケア内容をめぐる悩み」については、祖父母世代にある程度共有されるものと認識されているため、自分だけではなく孫育てをする祖父母世代全体のための解決策が求められる傾向がみられた。「こういうふうに孫の面倒みているひとなら、きっと同じだと思えますよ」⑦、「悩んでいるのは私だけじゃないと思います。お互いに知らないだけで。大人になってからの親子の間柄のことって皆さん悩んでいるんじゃないですか」⑪という発言がきかれた。それに対して「ケア基盤をめぐる悩み」については、極めて個人的な問題であり、それゆえに各人・各家庭によって事情が多様である場合が多いと認識されているため、解決を外部に期待することにはやや遠慮あるいは警戒心があるように思われる。「こういう問題の専門のひとがいるならいいですけどね、お祖母ちゃんなんだから孫のためにがんばってって言われたら何も言えないと思いますよ」③、「私が大変って言っても、ひとがみれば、好きで孫の面倒みてるわけですから。そのへんの事情をちゃんとわかってくれるひとじゃないと」⑨との発言がその心情をよく示している。

3 求められる支援

このように、孫と別居する祖母をみるかぎり、ケアギバーとしての祖父母に必要な支援はふた通り考えられる。ひとつは、悩みを主体的に解決できる能力を身につけさせること、もうひとつは、ケアギビングに関するプラクティカルな支援を提供する場所や機関が用意されることである。その場合、特にケアを必要とする若い孫をもつ祖父母の年代が、一般には40歳代から70歳超までと幅広く、必ずしも高齢者とはいえないことに留意される必要があろう。つまり、孫育て支援は「中高年世代」のための支援として準備されなければならないと考える。

(1) グランドペアレンティング教育

まず、「祖父母であること」「祖父母になること」を学ぶためのグランドペアレンティング教育が有効だろう⁹⁾。保健所、病院、児童福祉機関、

あるいは社会教育機関における「生涯学習あるいは成人教育としての祖父母クラス」の設置が考えられる。冒頭でもふれたように、既に祖父母クラスが稀少ながら開設されていることは評価に値するものの、現行の祖父母クラスにおいては、祖父母の多様性については顧慮されず、彼らは一律ケア要員としてとらえられる。それに対してここでいうグランドペアレンティング教育とは、最新の育児知識や育児ストレスをコントロールする方法を学ぶことにとどまるものではない。祖父母が自身の人生をどう生きるかを考え、ケアギビングのあり方をも含めて成人期の親子関係を主体的に構築し、夫婦¹⁰⁾・家族・親族関係に能動的に関わっていく力を育てるための教育である。つまり、グランドペアレンティング教育とは、祖父母であることによって自分の人生を豊かにするための生き方を学ぶものであり、祖父母としてケアギビングすることを生活の中心に据えるためのものではない。時間的・地理的条件によりクラス受講が困難な人々（例えば就労者や遠隔地居住者）に対しては、夜間開講、ビデオ教材、印刷物によって対応が可能と思われる¹¹⁾。

(2) インターネットの活用

インターネット人口の増加を考えれば、今後、子育て支援センター等が先駆けとなつて祖父母のためのウェブサイトが開設されることも検討に値する。ケアギビングにまつわる悩みを他人に知られずに相談したい、同じ境遇の人の意見を知りたい、あるいは、就労や家事で多忙だが孫育て仲間がほしいという声に応えるものとして、需要は高いと思われる。従って、そこは交流やネットワークづくりを助け、多種多様な情報が提供される場でなければならない。コンテンツとして考えられるのは、最近の家族問題と関連書籍・映画、孫との遊び方 (e.g. 読み聞かせ、お絵描き、旅行)、ギフト (e.g. 本、おもちゃ、教育資金)、コンピューター (e.g. PCの使い方、ゲーム)、健康・安全 (e.g. 安全な育児用品、食物、孫の病気と病後のケア)、孫とのコミュニケーション (e.g. 孫の親との関係、孫の成長に伴うつきあい方の変化)、各種テーマ毎のディスカッション、データベース

(e.g. 孫育てする祖父母の健康状態、支援グループ一覽)、交流会や講演会の案内、孫育てや家族についての悩み相談と回答等である¹²⁾。インターネットは、グランドペアレンティング教育についても活用可能だろう。

(3) 祖父母のネットワークづくり

既に地域によっては、高齢者のための施設に子どものための遊び場が設けられる等、孫連れの祖父母が来所しやすいような工夫がなされている(赤ちゃんとママ社 2003, 129 頁)。それも重要な試みと考えるが、これからは祖父母の「居場所」だけではなく「ネットワークがつくられる環境」を提供することが必要になってくると思われる。例えば、上で述べたインターネット利用者同士の交流会がもたれる際のコーディネートや会場確保について便宜がはかれることもそうである。この他、現在おこなわれている子育て支援プログラムを、祖父母のネットワークづくりの方向で拡充させていくことも可能であろう。例えば、地域住民が親子と遊びながら子育てを支援する場(本稿の調査地では「子育てサロン」という名称である)や子育てサークルへの参加は、祖父母同士の交流のみならず、育児を共通項とした若い親世代との交流を可能にする点でメリットの高いものとなるだろう。ただし、祖父母と同年代の指導員や相談員の配置等の工夫が必要と思われる。孫の就園・就学後は、孫が通う幼稚園や小学校等において、祖父母世代と孫世代が交流をもつ時間(一緒に体験学習をする、昔話をする)が定期的に設けられることも考えられる。これは、孫世代のための加齢・高齢者教育であると同時に、祖父母世代にとっては、ネットワークを築くための貴重な機会となるだろう¹³⁾。

V おわりに

最後に現代社会においてケアギバーとしての祖父母を支援することの社会的意義をあらためて確認しておこう。

少子化を少孫化とのみ理解するならば、祖父母の孫育て負担に対する支援の必要性はたしかに低

下する。しかしながら、「既婚女性の就労化、長寿社会の到来、高度情報化による価値意識の相対化」(野々山 2001, 310 頁)を背景とする家族の「多様化」「個人化」の進行がいわれる現在、子育てが核家族のなかだけでおこなわれるには難しい状況が生じている。公的な子育て支援が充分とはいえない以上、そして、親族ケアのプラス面を活かすことを考えるならば、祖父母に頼らざるをえない部分はまだ大きい。そこにおいて、ケアギバーとしての祖父母は、核家族という形を超えて家族・親族が弾力的に維持あるいは再編成され、多世代間の親密な結びつき(Bengtson 2001)が創出されることを可能にする存在といえる¹⁴⁾。「子どもたちが成人しても、祖母っていう立場でまとめ役みたいな役目があるんですよ。(中略)私たちが何とかこうやってここにいるから、何とかバラバラにならないでいられるわけですから。子どもたちの家族や孫たちをつなぐ人間がいないと」③という言葉は象徴的である。ところが、その一方で、祖母たちは孫育てを最大の喜びとしているわけではなく、「元気なうちは自分の生活を楽しみたい」という期間限定的な自立志向性を持ち(表3)、また、それを可能にするだけの経済力に恵まれている。

従って、ケアギバーとしての祖父母を支援することは、後期高齢期に向けて祖父母が自身の生活を充実させ、自立に必要な人間関係を構築していくためのエンパワメントを保障しつつ、多世代間関係における結節点としての働きを助けること、と意味づけることができる。この先三世同居はさらに減り、加えて、これまで以上に多様な事情(例えば、シングルペアレント、シングルマザー、ステップファミリーの増加)により、ケアギビングを求められる祖父母が増えることも予想される。これらの諸点を鑑みて、孫育てに関わろうとする祖父母世代への支援は、ますます重要な課題となってくるだろう。

平成 15 年 8 月投稿受理

平成 16 年 4 月採用決定

注

- 1) 「育孫書」(例えば、赤ちゃんとママ社編『孫との素敵なつきあい方』2003年、主婦と生活社編『孫と上手につき合う本』2001年)の出版が相次いでいる(産経新聞2003年4月17日付、「育孫書続々出版 新時代の祖父母のあり方示す」)。
- 2) 以下、原則として、「祖父母による孫育て支援」については「ケア」「ケアギビング」という語を、「孫育てする祖父母のための支援」については「支援」という語を用いる。
- 3) 認知される精神的ケアの量は、祖母の認識において、①祖母と対象子家族との日常的な行き来が多く、身体的・経済的ケアがさかんに授受され、同一家族との認識が親子間で共有されているほど、②ケアの負担によって祖母の生きがい侵害されていないほど、③後期高齢期以降の介護が対象子家族に期待できるほど、多くなるとの結果が得られた(小野寺 2003)。
- 4) 本ヒアリング対象者は、筆者が1998年におこなった配布調査「育児支援をめぐる世代間関係の実態調査」の対象者であった祖母122人のなかから選んだ。1998年調査については、小野寺理佳, 1999, 「育児支援をめぐる世代間関係 妻の就業類型を手がかりにして」『北海道大学教育学部紀要』79: 191-219. を参照。
- 5) ケアギビングはその内容から身体的ケア、経済的ケア、精神的ケアの3つに分類した。身体的ケアとは、例えば、母親が不在時等に世話をするといったものであり、対象は孫である。経済的ケアとは、育児費用等の援助や小遣いの他、子ども部屋増築費用等育児のプロセスにおいて必要とされる高額なものをいう。小遣い以外は孫の親が対象である。精神的ケアとは、育児に関する具体的知識や情報を提供したり、育児労働にたずさわる者を精神的に支えるものである。具体的には、相談相手を務めることが中心となる。対象は孫の親世代である。
- 6) ヒアリングにおいて「祖母として孫の育児に積極的に参加したいか」と問うたところ、⑤を除く全員が否定的な回答をした。そこから、とりわけ孫と別居する祖母にとっては、孫可愛さはどちらかといえば観念的な性質のものであり、対象子への情が勝るという現実がうかがわれた(小野寺 2003)。これに対して、①の対象子の妻は1998年調査において「ケアギビングには感謝するが老後期待がやや重い」と述べている。子世代の認識との比較検討は今後の課題としたい。
- 7) 祖父が祖母の悩みや不安を理解し協力してくれる存在であるか否かが、祖母の悩みの深刻度を大きく左右すると思われる。今回のヒアリングでは、就労する祖父が10人中7人を占めていることもあり、ケアギビングは専ら家事の一部

とされ、その主導権は祖母に委任されている。祖父がケアギビングの当事者として関わろうとしないことへの「不満」に言及したのは11人のうち③のみである。孫育てに積極的な祖父は⑤のみであった。祖父についていえば、リタイア前後で孫育てへの関わり方が大きく異なることが予想される。ケアギビングにおける祖父と祖母の異同や特徴を含むいわゆるジェンダー視点からの祖親性研究はようやくはじまったばかりである。これについては稿をあらためて論じたい。

- 8) 高額援助の内容は、自宅新築費用一部・全額援助、自宅マンション購入費用援助等。資産承継の内容は、祖父母の自宅土地や自宅マンションの相続である。
- 9) 祖父母教育といえば、ストロームらによる研究が知られている。例えば、彼らは、祖父母の望ましい資質と個人的な成長がなされるために必要な家族関係について測定する尺度(Grandparent Strengths and Needs Inventory)を作成し、祖父母として役立つ存在になるための学習プログラムの必要を唱える。GSNIには、祖父母バージョンの他、孫の親世代および孫のためのバージョンがある。GSNIは、①祖父母としての満足感②祖父母としてうまく遂行されている役割③祖父母として教えていること④祖父母として直面する困難⑤祖父母として孫に困惑させられること⑥祖父母として孫を理解するために知っておくべきことの6つ、計60項目からなる(Strom et al. 1996; Strom & Strom 2000)。日本の祖父母世代に関するものとしては、ロバート・ストローム、シャーリー・ストローム、パット・コリンズワース、佐藤三郎、牧野カツコ、佐々木保行、佐々木宏子、西尾範博「日本の三世代からみた高齢者の学習」『鳴門教育大学実技教育研究』4 (1994): 49-61 がある。
- 10) ジェンダー関係の不均衡によって、ケアギビングが祖母に偏った形で配分されている実態など、孫育てをめぐる夫婦関係についてもとりあげられることになる。
- 11) アメリカでは少人数の講義形式や印刷媒体が主に利用されている。Chenoweth (2000) によれば、講義形式とは、個人的に自分の家に来てもらうものの他に、児童ケアセンター、教会、シニアセンター、職場、学校等に集まって話をきくというものである。印刷媒体形式とは、ニューズレターやパンフレットをあらかじめ配布し、必要時に各自がそれを読むというものである。印刷物配布の方が高くつくがより教育的効果が高いという報告がある。近年はインターネットの利用が増えている。
- 12) 例えば、アメリカにおける祖父母向けウェブサイトに、The AARP Grandparent Informa-

- tion Center の www.aarp.org や, The Foundation For Grandparenting の www.grandparenting.org といったものがある。
- 13) これもアメリカの例であるが, 学校・保護者会・地域のリーダーの協力の下, Grandparents Day あるいは Grandperson Program といった名称で実施されている。
- 14) 先進諸国では, 子どもにとって, 可能なかぎり家庭的なおかつ産みの親の家庭に近い環境が重要であるとの考え方が主流となりつつある。それを示すものとして, 施設養育から里親養育, さらに, 親族里親養育への流れがある。わが国においても, 2002 年度に親族里親 (三親等内親族) 制度がスタートした (庄司ほか 2000)。
- 参考文献**
- 飯島久美子・松園典子・大日向雅美・沢田啓司 (1991) 「母親に対する育児に関するアンケート調査から」『小児保健研究』50 (1) : 16-19。
- 小野寺理佳 (2003) 「別居祖母の育児支援満足度をめぐる一考察」『家族社会学研究』14 (2) : 77-87。
- 北村安樹子 (1999) 「家族における世代間交流 祖父母にとっての孫の存在」『LDI レポート』106 : 27-53。
- 財津庸子 (1995) 「これからの高齢者と子育て」, 九州家政学総合研究会編『高齢者生活文化の創造』, 九州大学出版会, 107-23。
- 清水美知子 (1994) 『祖父母と孫のかかわりに関する調査研究報告書 祖父母の孫育てをめぐって』, 兵庫県家庭問題研究所。
- 庄司順一・山本真実・高橋重宏・小山 修・谷口和加子・安藤朗子・武島春乃・鈴木祐子・米沢普子・櫻井奈津子・木原純子・西川公明・篠島里佳・奥山真紀子・横堀昌子・益田早苗・相澤仁 (2000) 「欧米における里親養育研究の動向 1990-1999」『日本子ども家庭総合研究所紀要』37 : 79-95。
- 杉井潤子・堀 智晴・泊 祐子・早川 淳 (1996) 「祖母の孫育てに関する研究 主観的幸福感との関連において」『家族関係学』15 : 89-102。
- 高橋博子 (1995) 「育児をめぐる世代間交流」, 青井和夫編『高齢化社会の世代間交流』, 長寿社会開発センター : 84-115。
- 野々山久也・清水浩昭 (2001) 『家族社会学の分析視角』, ミネルヴァ書房。
- 福島道子・古田真司・畑山伊佐枝 (1991) 「母親の育児に対する社会的支援」『小児保健研究』50 (5) : 602-06。
- 宮中文子・松岡知子・西田茂樹・岩脇陽子・中谷公子・中島健二 (1995) 「中高年女性 (祖母) の子育て参加の実態と心理的健康との関連について (第1報)」『老年社会科学』17 (1) : 21-29。
- 吉澤英子 (1990) 「中高年 (おばあちゃん) の子育てをめぐって」『母子保健情報』21 : 42-46。
- Bengtson, Vern L., 2001, "Beyond the Nuclear Family: The Increasing Importance of Multigenerational Bonds," *Journal of Marriage and Family*, 63 (1) : 1-16.
- Chenoweth, L., 2000, "Grandparent Education", Bert Hayslip Jr. & Robin Goldberg-Glen eds., *Grandparents Raising Grandchildren*, New York : Springer Publishing Company, 307-26.
- Strom, R. & S. Strom, 2000, "Intergenerational learning and family harmony," *Educational Gerontology*, 26 : 261-83.
- Strom, R., T. Beckert, & S. Strom, 1996, "Determining the success of grandparent education," *Educational Gerontology*, 22 : 637-49.
- (おのでら・りか 北海道大学大学院
教育学研究科博士課程)